

## 瓊浦余韻

——京都大学附属図書館蔵『崎陽蜀山人書集』から——

### 宮崎修多

文化元年から翌二年にかけての幕臣大田南畝（一七四九～一八二三）の長崎出役に関しては、南畝自身が多く  
の記録を残していることもあって、その詳細な事蹟は自づから明らかである。詩集の『鶯谷集 附巖原集』『瓊浦  
集』、日記・紀行として『百舌の草茎』『小春紀行』、雑記の『瓊浦雜綴』『瓊浦又綴』『瓊浦遺珮』、公用記録の  
『長崎表御用會計私記』『俄羅斯考・羅父風説』など、またなんといつてもその生活の細部を窺う屈強の資とし  
て、江戸の息子定吉や島崎金次郎ら親族宛書簡、また現地で最も親しんだ外浦町乙名、岩原目付屋敷御用達の商  
人中村作五郎（号李圀）宛の二十数通にもおよぶ長簡があった。それらによって、我々は江都での日々以上に、  
かの地での南畝を細かく垣間見ることが可能であり、早く玉林晴朗『蜀山人の研究』（昭和十九年刊、畝傍書房）  
でもこの出張について四十数頁が割かれている。その後も濱田義一郎による論文「江戸文人の歳月」（大妻女子

大学文学部紀要第15号、昭和五十八年三月）でさらに日常が考証され、近年の新名規明による論考「大田南畝の長崎（一）」（四）」（長崎談叢84）91輯、平成七年十一月（同十四年五月）は、長崎における公務と現地の人物について詳述する。しかしそれらすべて、南畝自身の記述の多さに起因する成果であることはいうまでもない。

それゆえ、この西遊時の文業を偶々目にした資料で少しく補填するなど、屋上屋を架すのそしりを受けかねまいが、南畝好きとして放擲するには惜しい文字、〈遊び〉なる共同研究のテーマにも甘えて、あえてここに開陳することにする。かつて『大田南畝全集』（岩波書店刊）編纂時には、碩学諸家のご助言に支えられ、あちこちに眠る遺文発掘のお手伝いをさせてもらった。編者の濱田先生、中野先生、そして版元側編集の飯泉平伍さんたちとの吟味作業も懐かしいが、その方々が鬼籍に入られたいま、たとえば此度あらためて提示する「鶴枕の記」が、従来いくたびか活字になっていながら『全集』未収のままであった事情をお尋ねするなどという機会も、ついに失われた。南島や北地に残る先の大戦々没者の遺骨収集は、七十五年以上の時を隔て、いよいよその判別の困難が事業進捗の障碍となると聞く。『全集』完結後の我々もそれと似たような局面に立たされているのかも知れないが、このように時折出現する南畝の逸文を前に、後学は蛮勇を奮って時間の泥土を落とし、審定してゆかねばならぬのであろう。

## 1 『崎陽蜀山人書集』について

本稿で言及する資料『崎陽蜀山人書集』は、京都大学附属図書館蔵（KG／248／キ3）、四針袋綴の写本

一冊（大本、23・3×16・4 糲、楮紙）。無地の卵色表紙。題簽は青の打曇りの入った用紙に印刷子持ち枠、枠内に「崎陽蜀山人書集 全」と墨書され、左肩に貼られる。巻首の扉裏に大阪質商濱和助の蔵書票あり。

その蔵書票の貼ってある最初の白紙の扉1丁を入れて墨付きは総70丁。構成は大きく四つの部分に分かれ、各々の分量を、各部の冒頭に掲げてある扉題や内題で示せば左のごとし。

一、「西遊吟草」 23丁

二、「鶴枕之伝」 18丁

三、「崎陽蜀山翁在任中書遺法帖」 20丁

四、「（松花堂芳野の道記）「珠聯合璧」写し」 8丁

今回主として翻字紹介するのは右のうち一と二である。三は後述するが、（財）工芸学会麻布美術工芸館蔵とされる書画帖『蜀山人園繞名蹟集』とはほぼ同じものの写し。三は既に『名蹟集』として翻刻が備わり、四は覺書的な抄書部分なので、いづれも省いた。一冊は別の機会に作られた四種の写本を、近世期のうちに合綴されたもののらしく、筆跡も、各部微妙に異なる。

## 2 「西遊吟草」

綴じこまれた最初の部分は「西遊吟草」と内扉左側に題された詩歌稿である。南畝特有の筆跡を、比較的大字で模したもので【写真1・2】、詩二十一首、和歌十七首の計三十八首。南畝の後語には「詩二十首」とするが

翻刻19と20が同題の連作ゆえ、これを一首と数えたか。前後で韻を異にするので、ここでは二首と扱う。

南畝の後語にもあるように、これは西役途次の詠草から、到着後に選んで清書し、高木公輔に奉呈したもの。写しであるが、末尾にある雅楽堂の識語部分は朱筆訂正の入った稿本のままで実捺の印記もあり、ここは雅楽堂自身による書写識語と認定してよい。それに従えば、南畝自筆本がそのまま高木氏のもとにあり、かつてそれを河久保氏宅で一見したことがある雅楽堂が、たまたま大悲庵でそれに再会し、借り出して写したのが天保十四年八月三日だったということになる。河久保氏は未考。大悲庵は諏訪神社の少し下のほうにあった崇福寺の子院だが、今はない。この雅楽堂書写の五年後に日本に密入国し、その後長崎の阿蘭陀通詞たちに英語を教えたカナダ人ラナルド・マクドナルドが、最初幽閉された場所としても知られる。筆跡配字改行等、原本の体裁通りに写したもののごとくで、その様相からみて元は卷子ではなく折帖ないし冊子体だったとおぼしい。

南畝がこの詩歌稿を謹呈した、そして南畝の著作中にも二三度登場するこの高木公輔とは、いかなる人物か。南畝が著作中で「県令」の肩書を冠していることから、長崎代官の高木作右衛門と混同されることが多く、実際滞在時の代官である高木作右衛門十代忠任とも公務上関係は存したようであるが、この公輔は代官ではない。高木作右衛門家には長崎代官に任ぜられる本家と、町年寄に任命される分家筋の伝左衛門系があった（原田博二「長崎の高木家（作右衛門系・彦右衛門系）の家系について」）長崎談叢98輯、平成二十二年三月）。高木公輔というのは代々清右衛門を名乗る後者の系統のうち、第十一代清右衛門忠郷（墓碑には「忠卿」）ではなからうか。明和四年九月町年寄に任じ、寛政二年九月には長崎会所調役となっている。町年寄は元来長崎における自治を預かる町人だが、実質的には幕府から役料七十俵五人扶持を支給、年頭はその代表者が江戸城白書院で御目見

え、享和二年からは帯刀も許された旗本格であった。長崎会所調役の兼務も慣例化していて（五人扶持追加）、南畝とはここで多く仕事を共有していた筈である。長崎会所はいうまでもなく交易・通貨・運上に関する幕府の管理部署で、当然ながら貿易支払い用の輸出銅や俵物の流通調整も主要な任務であった。三年前に出張した大坂の銅座が、この長崎における輸出銅確保のための役所であることを考え合わせれば、支配勘定として命ぜられた両度の出張は公務として連続するものであり、南畝にとって蜀山の号は長崎においてさらに重きを増したのである。学問にも通じていたらしい高木公輔は、南畝の常勤した目付屋敷もさることながら、むしろ会所での近しい友人だったであろう。在職時期としても公輔をこの高木忠郷にあてるのが妥当だが、それは忠郷の戒名が「泰信院殿公輔、衍達居士」なることからの類推でもある。文化八年五月没、六十三歳。南畝とは同甲であった。

この「西遊吟草」で見るべきは、旅中の狂歌もさることながら、南畝の自筆詩稿『鶯谷集 附巖原集』中に欠落していた詩が、十二首ほど補えることである。長崎途次の詠中、特に桑名から豊後灘までが、南畝詩稿ではなぜか題詞だけ残って、詩は菌の抜けたごとくになっていた。「十二首ほど」と曖昧に記したのは、新出の狂歌にも加えて、『全集』所収の詩稿で知られるものとは若干異なる句が見られるからであって、たとえば七絶「天龍川を渡る」が、この「西遊吟草」では、

渡天龍川（天龍川を渡る）

14 大天龍望小天龍      大天龍は小天龍を望み

河上天龍雲雨従      河上の天龍雲雨従ふ

五十三亭行欲半 五十三亭行半ばならんと欲し

長風吹送海浜松 長風吹き送る海浜の松

\*2489

(詩の頭の洋数字は後掲翻字の通し番号、末尾\*を付した四桁洋数字は『全集』での詩番号)

と記され、かたや自筆詩稿では、結句「風高古駅海浜松」(風は高し古駅海浜の松)となっていて、おそらくはこの「風高…」が後考である。

以下、『全集』の補遺として、稿本欠落の十二首を『全集』の書式に準拠して摘記しておく。

桑海舟中作〔桑海舟中の作(二首)〕

19 一葦飄々五両風 一葦飄々五両の風

片雲疎雨度遙空 片雲疎雨遙空に渡る

早臨滄海辞仙境 早に滄海を臨みて仙境を辞し

回望蓬萊十二宮 望を回らせば蓬萊の十二宮 \*2492

20 雨歇長年催桂棹 雨歇みて長年桂棹を催し

去晴積水見漁舟 晴を去りて積水漁舟を見る

群山漸識桑城近 群山漸く識る桑城近きと

彩翠迎人是勢州

彩翠人を迎ふ是れ勢州

\* 2193

石山下尋幻住菴跡芭蕉翁  
田橋〔石山の下に幻住菴の跡を尋ぬ芭蕉翁  
の田橋〕

21 応神山色碧崖鬼

応神の山色碧崖鬼けはし

一脉涓泉漱石苔

一脉の涓泉石苔に漱ぐ

幻住老人何処在

幻住老人何処にか在る

我尋遺址夢中来

我遺址を尋ねて夢中に来る

\* 2197

秋雨辞浪華客舎〔秋雨浪華の客舎を辞す〕

24 中秋信宿在難波

中秋に信宿して難波に在り

露滿蒹葭月色多

露蒹葭に満ちて月色多し

朝雨將臨西海道

朝雨將まさに西海道に臨まんとして

無端更渡十三河

端無くも更に渡る十三河

\* 2500

舞子浜〔舞子の浜〕

26 疎松疑舞換

疎松舞換かと疑ひ

細磊欲珠明

細磊珠明ならんと欲す

谷翁東山妓 谷翁と東山の妓と

樵遊一旅情 樵遊また一旅情

\* 2502

宿室津〔室津に宿す〕

28 室津山色翠微々 室津の山色翠微々たり

檻外帆檣帶夕暉 檻外の帆檣夕暉を帶ぶ

明日將乘西海浪 明日將に西海の浪に乗らんとして

長風万里与神飛 長風万里神と与ともに飛ぶ

\* 2505

泊鞆浦〔鞆浦に泊る〕

30 仙水山回列翠屏 仙水山回めぐり翠屏に列なる

恍疑泉石在前庭 恍として疑ふ泉石前庭に在りと

一叢村落人烟密 一叢の村落人烟密なり

古寺鐘声響晚汀 古寺の鐘声晚汀に響く

\* 2510

八月廿五夜泊加室值風雨〔八月廿五夜加室あに泊りて風雨に値あふ〕

32 風雨捲飛濤 風雨飛濤を捲き

蓬窓寢久始 蓬窓寢久しく始まる

識吾精神（ママ） 吾が精神を識り（ママ）

全於一斗酒 一斗の酒よりも全たし

\*一字欠か

\* 2512

秋雨舟次室積港（秋雨舟室積港に次ぐ）

33 普賢碕下列人家 普賢の碕下人家に列なり

阿那風帆入水涯 亜那たる風帆水涯に入る

黛暗蛾眉山上翠 黛は暗し蛾眉山上の翠

波淘象鼻海辺沙 波は淘さうふ象鼻海辺の沙

疎松乍断危檣出 疎松乍ち断じて危檣出で

宿雨纔晴積霧遮 宿雨纔に晴れて積霧遮る

昔日性公遊此地 昔日性公此の地に遊び

曾將色相觀空華 曾て將はた色相空華を觀る

\* 2514

室積舟中風雨大起（室積舟中風雨大いに起る）

34 平生每苦乏余間 平生毎つねに苦しむ余間の乏しきを

三日留舟海島間 三日舟を留む海島の間

雨打篷牕無一事

雨は蓬牕を打ちて一事無く

臥聞波浪大於山

臥して聞く波浪山よりも大なるを

\*2515

九月朔日新晴舟過周洋〔九月朔日新たに晴れ舟は周洋を過ぎる〕

36 周洋晴色淨無塵

周洋の晴色淨く塵無し

憶昨風濤捲雪頻

昨を憶ふ風濤雪を捲くこと頻りなり

故国一辞流火節

故国一たび辞す流火の節

他郷初及授衣辰

他郷初めて及ぶ授衣の辰

管松緑嫩連洲觜

管松緑嫩<sup>とん</sup>す連洲の觜

笠戸山回偃海浜

笠戸山回<sup>や</sup>りて海浜に偃む

赤馬関辺何日達

赤馬関辺何れの日にか達せん

白雲飛処影鱗々

白雲飛ぶ処影鱗々たり

\*2516

豊洋舟中〔豊洋の舟中〕

38 中関西去布帆輕

中関西に去りて布帆輕し

況值狂風暴雨晴

況や狂風暴雨に値ひて晴るをや

天末遠山纔有黛

天末の遠山纔かに黛有り

波間絶島不知名

波間の絶島名を知らず

浹辰偃臥柁楼底

浹辰偃臥す柁楼の底

尅日速回使者行

尅日速回す使者の行

沿海侯藩能敬命

沿海の侯藩能く命を敬ひ

壺漿簞食自相迎

壺漿簞食自づから相ひ迎ふ

\* 2517

なお、この「西遊吟草」の扉には旧蔵者印が二顆実捺される。一は「源姓中邨／家図書記」（子持梓長方印・朱文）、一は「奈嘉牟良」（単梓長方印・朱文）。いずれも南畝と親炙した李圀中村作五郎に関係する家のものかと推察するが、これが「吟草」部分のみの蔵書印か、巻頭に捺されるものゆえ一卷全体の所蔵を表すものか、俄かには決しがたい。これは当該写本の性格や来歴と関わる痕跡と思われるので、あらためて後述する。

### 3 「鶴枕之伝」

長崎丸山の茶屋引田屋（邸内に花月楼あり）秘蔵の「鶴の枕」に寄せた諸家の書画を写した部分。南畝はこの枕のことを『瓊浦又綴』に記している。

寄合町引田屋の所蔵なりとて、鶴枕といへる長枕を見るに、鶴の巢籠ぬひたるきぬ両面にあてたり。手にておせばいづくにても笛の音あり。（欄外）（世俗に玄宗皇帝の枕也といふ。俵屋天外為携来、もとは蜀紅の

錦にてつゝ、みしを、たれ人か解きとりて、今は鶴の巢籠の縫もの、みのこれりと云。按元薩天錫集、鸚鵡曲題薩天楊妃の詩あり。結句、繁華一夢人不知、万事邯鄲品公枕とあり。此枕もし真物ならば、同日の話なるべし。文化二年丙寅七月九日記

欄外小記は文化三年、南畝が江戸にて薩天錫集を見て書き足した部分。未見だが枕はいまでも押せば小さくヒイと鳴るという。さて、「鶴枕之伝」と扉の付されたこの部分は、各家ばらばらの染筆を合写したというよりも、既に卷子か書冊、折帖などに貼り交ぜになったものをそのまま写したふしがある。ただ、その貼り交ぜの原本が以後もそのままの形で残存したか否かは怪しい。ここに翻刻するものの多くは古賀十二郎の遺著『丸山遊女と唐紅毛人』（初版昭和四十四年、新訂版平成七年、前後編二冊、長崎文献社刊）の初版時より紹介されていたものの、そこでは本写本『崎陽蜀山人書集』の内容や配列を踏襲した感じが薄いのである。古賀翁はあるいは当時引田屋にまだ残されていた各家自筆本の数々を参照したのかもしれないが、引田屋の文物を受け継ぐ現在の「史料亭花月」には、そうした自筆本の類は今のところ発見出来ないとのことであった。その代わり、古賀翁参照のものとも、『崎陽蜀山人書集』とも相違する、諸作品の出入りのある写し物の卷子が一本あるのみ。またそれらとは別に、文政頃の筆記といわれる『崎陽雑話』なる写本一冊（長崎純心大学長崎学研究所越中文庫蔵、『長崎・オランダ関係資料 文化長崎一件他』長崎純心大学長崎学研究所第一輯、平成十一年三月刊に翻字・解題あり）にも鶴の枕関連のいくつかが抄写されている。この四種の関係が定かならざる以上、原本らしきものの出現を俟って報告すべきかと、今までなんとなく躊躇していたものの、この十数年間ついに発見できなかった。遅ればせながら今般、比較的原本に近い写しと思われるこの『崎陽蜀山人書集』によって報告を思い立った次第であ

る。なお、南畝の「鶴枕の記」だけの紹介ならば、本山桂川著『長崎丸山噺』（大正十五年坂本書店刊）があり、坪内逍遙とともに花月楼で実見した枕の様態を記すとともに、「一卷の軸」となった諸家書卷の存在も報じ、そのあたりが比較的早い紹介か。また、枕の写真と南畝記文の一部引用が増田廉吉編『長崎南蠻唐紅毛史蹟第一輯』（昭和二年長崎史蹟探究会刊）にも見える。

以上述べたことを、各々の資料群採録の記文を列挙することによって整理しておく。

① 京都大学附属図書館蔵『崎陽蜀山人書集』一冊

- ・天外（題字）
- ・南畝「鶴枕の記」
- ・半山（五絶）＊文化四年秋
- ・韋行（唐婦人図）＊「伊寿気写」と朱書
- ・北筑四軒（発句）
- ・高津の菴（記文と発句）
- ・ちぬの園「鶴枕辞」（発句を付す）
- ・都梁（七絶）
- ・鳴たつ菴葛三（賛と発句）＊文化七年春
- ・雉鳴（マ）（発句）

・尾張 由肆（発句）

・江処士（唐人図） \*文化七年秋 「以寿気写」と朱書

・山口拜之「鶴枕図」（外箱・枕全図・鶴の模様）

・季鷹（和歌）

・大梅（発句）

・雄嶺（発句）

・禾木（発句）

・一具閑人（発句）

・梅室素芯（発句）

・由誓老人（発句）

・かつしか鶯來庵（戯文と狂歌・発句）

・久松菊也「詩歌帖之跋文」（発句を付す） \*九月九日堂主人

② 史跡料亭花月蔵「鶴枕記卷」（仮称） 一巻

・天外（題字） \*関防印「墨池／清興」

・南畝「鶴枕の記」

・半山（五絶） \*文化四年秋

・熙梅（漢文題言）

・北筑四軒（発句）

・高津の菴（賛文と発句）

・ちぬの園「鶴枕辞」（発句を付す）

・都梁（七絶）

・鳴たつ菴葛三（賛文と発句） \*文化七年春

・雉啄（発句） \*①の雉<sup>ママ</sup>鳴句と同じ

・尾張由肆（発句）

③ 長崎純心大学長崎字研究所蔵『崎陽雑話』一冊

・南畝「鶴枕の記」

・半山（五絶） \*文化四年秋

・北筑四軒（発句）

・高津の菴（記文と発句）

・ちぬの園「鶴枕辞」（発句を付す）

・鳴たつ菴葛三（賛と発句） \*文化七年春

・雉啄（発句） \*①の雉<sup>ママ</sup>鳴句と同じ

・尾張 由肆（発句）

④ 本山桂川『長崎丸山噺』（大正十五年坂本書店刊）所収の翻刻

・南畝「鶴枕の記」

⑤ 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』（昭和四十四年長崎文献社刊）所収の翻刻

・南畝「鶴枕の記」

・鳴たつ菴葛三（賛と発句） \*文化七年春

・九月九日堂主人（賛と発句） \*前掲①久松菊也「詩歌帖之跋文」と同じ

・枳園「鶴の枕乃詞」（和文） \*明治十八年三月五日

・季鷹（和歌）

・筑藩 青木武雄（和歌）

・春川醉客（沢宣嘉、和歌）

・尾張 由肆（発句）

・麦堂（賛と発句）

・史千「寄鶴枕」（賛と発句）

・美濃行脚 友左坊（賛と発句）

・梅室素芯（発句）

・禾木（発句）

・由誓老人（発句）

・其映（賛と発句）

・魯山（発句）

・素朶（発句）

・行脚老槃（発句）

・来帰（発句） \*安政六年四月

・薩州素朗（発句二句） \*文久元年八月

・呉門沈萍香（七絶） \*天保十五年三月三日

・馮鏡如（七絶）

・呉郡楊秋平（七絶） \*安政六年十月

\*なお翻字はないものの、古賀は著書中でその他記文としてちぬの園、高津の菴、発句として茶静、都梁（詩の誤りか）、由肆、北筑魚渕、詩の細川林谷、林雲達らの作の存在を記しており、右掲の資料類所載作品以外にもあったことが知られる。また、長崎県立長崎図書館古賀文庫には九月九日堂主人による詩歌帖跋文の原本からの写しと思われる資料が残る（古賀13―185）。それによると跋文には関防印「清風／明夜」、署名印「久松姓／菅原／定○印」が捺されていた由。

このように、古賀十二郎の嘱目しえた作品数が群を抜いて多いのであるが、まとまりの良さと多彩さという点では『崎陽蜀山人書集』『鶴枕之伝』が、題字に始まり跋文に終わるという首尾一貫した構成も含め、ある時期



【写真1】 鶴枕書巻 題字 (史跡料亭花月蔵)



【写真2】 鶴枕書巻 題字関防印 (史跡料亭花月蔵)

に存在したと想像される自筆貼交ぜ帖の原姿を伝えるものごとくである。花月現蔵の書卷②は、この原本からの抄出本のようなのであるが、他本に見られぬ熙梅なる人物の小文の題言があるのがやや気になる。また、花月本では天外の隸書題字に關防印の実捺してある体裁が【写真1・2】、一見写しからぬ印象を与えるが、全体どう見ても一手による書写としか思えない。ここに想像を逞しくするならば、この花月本は原書画帖に南畝以下の書がある程度貼り込まれた段階で、天外自身が手元に残す目的で作った抄写本とは考えられないか。巻頭「華表僊歌」の天外題字はその篆体を双鉤で模した『蜀山人書集』のほうが真に迫っており【写真7・9】、画図の類も丁寧に細写されている。ところが花月本では題字の書体が変わっていることが、むしろ題字筆者本人の手控えであることを、それとなく暗示しているように思えるのである。画図の類も無い。大正期に本山桂川が見た「一卷の軸」というのも、あるいはこの写しの卷子だったのではあるまいか。ちなみに古賀の記述によれば、天外なる文人は藤田氏。引田屋の縁戚関係にある本紺屋町の俵屋なる商家だという。俵屋なる屋号は南畝も『瓊浦又綴』に記していた。

また『蜀山人書集』所収の「鶴枕之伝」は、作者の多彩さと視覚的な要素が、他本に比して頗る高い。和歌の賀茂季鷹や、俳諧の鳴立菴葛三、雉啄、由誓、一具、素苾（梅室）、そして江湖詩社の詩人として勇名を馳せながら晩に俳諧師に転じた大梅（小島梅外）らがその名を連ねる。肝心の鶴枕そのものに関しても、引田屋好事の主人山口太左衛門拜之自らによる詳しく実質的な図解に目を奪われるであろう【写真14・15】。現在の鶴枕の写真も併せて掲げておいた【写真16】。しかしなんといっても瞠目すべきは男女二枚の細密な唐人図で、伝説におけるこの枕の旧主楊貴妃と玄宗帝とを描いたものと思われる【写真11・13】。狎と侍女を連れた楊貴妃図のほう



【写真3】 韋行筆 引田屋主人(山口拜之か) 像



【写真4】 韋行印 引田屋主人像（部分）

は落款無しと見えたが、その前の丁の半山詩の揮毫者のごとくに記される「韋行（印）」なる署名が、次丁の美人図の作者を示すものと気が付くのにさして時間はいかからなかった。なんととなればこの「韋行」こそは、新町風俗を活写したあの愉しくも奇抜な画譜『葵氏艶譜』（享和三年刊）の作者斎藤秋圃の前号であり、「韋行」印の捺された当代の引田屋主人（恐らくは拜之）の彩色の肖像をこのほど史跡料亭花月で寓目、両者がわが脳中で繋がったからである【写真3・4】。韋行が当時秋圃の氏名葵衛の、衛の分字なることはいうまでもない。

四条派出身の秋圃は文化初年長崎に来て、沈南蘋風の写実画を学んでいた。同じく長崎に渡来していた蘇州出身の南宗画家江稼圃（名大来、字泰交）に入門しようとしたものの、「あなたに教えることは何もない」と断ら

れた逸話も知られるが（許斐友次郎「筑前の斎藤秋圃画伯を憶ふ」九州日報、昭和八年五、六月連載）、この長崎時代に秋月藩主黒田長舒の眼に止まり、文化二年に藩の絵師として抱え入れられることになる（小林法子「筑前関係絵師資料―齋藤秋圃略年譜―」福岡大学人文論叢 第25巻1号、平成五年六月）。これら「韋行」の二作品は、秋圃のお抱え絵師になる前後の、長崎で自由を謳歌していた時期の珍しい遺物であった。そして「鶴枕之伝」に見るもう一枚の唐人図、恐らくは付き人を従えた玄宗皇帝の姿が、他ならぬこの江稼圃の筆によるものらしく（落款「江処士」、紙上でのみとはいえ花月楼の鶴枕をめぐって和漢二圃が揃い踏みしたことには驚かされるのである。恨むらくは両図とも極めて細密ながら写しに過ぎないことで、才気に富んだ両者の真の丹青の手際を見るには、原本の出現を待つのはない。

#### 4 「崎陽蜀山翁在任中書遺法帖」およびこの写本自体の性格について

前述したように、この部分は旧麻布美術館所蔵の『蜀山人園繞名蹟集』なる、いささか変わった題名の貼交帖の内容にほぼ同じい（以下『名蹟集』と略す）。残念ながら今回『名蹟集』調査の機会を得ることができなかったが、既にこれは柴田光彦、岡本祐美によってその全体像が紹介されている（麻布美術館研究紀要2、昭和六十一年十一月）。よって、あらためてここに翻字することは控えるが、「ほほ」としたのは、現『名蹟集』に無い作が、この写本に含まれているからである。したがってこの写しは、『名蹟集』のもとの体裁を伝える資料としてのみ、辛うじて存在意義があるといえよう。両者を比較すればその配列の相似からして、書写者はいまの

『名蹟集』と同一のものを参照したとみてよいが、現在見あたらないものは、どの段階かで本帖から剥がされた結果なのではなからうか。それは以下の徴証から見て取れる。

現書画帖にないものの第一は次の部分である。

「唐紙」登大德寺後山

石磴跨攀苔相祠 春風未至梅香嶠 祇林一縱登臨目 大海千帆引九夷

南畝

「半切」愛宕山看花值風雨

杏花園

欲尋芳樹叩巖扃 雨足隨風昼杳冥 半腹応回俗士駕 遺文已勒宕山靈

雨風は花のあたこの山さくらこのは天狗とちらせ給ふな

このあたりの畑を千疊敷といふ

大風の吹ゆく麦の青たゝみ千帖敷の雨のあし音

兼好などはよろこふへけれど美景は有にしくはなし

右の唐紙と半切の二枚分（「」内は、書写者が原本の体裁を頭書している箇所）が並んで、現書画帖でいえば馬蘭亭狂歌「東風吹は長崎までも匂ふらし」の後に位置していたことになっているが、今はこれを欠く。

もう一つは、この写本の「遺法帖」末尾に写された（体裁は「えきぬ」、南畝古稀自賀の福祿寿菱形箋である

【写真17】。従来我々はこれと同じ物を文政元年三月二十日付中村李圀宛の南畝書簡とともに貼り込まれたもので知っているのだが（『全集』第十九巻所収『書簡、長崎市立博物館蔵』）、この箋もまた現『名蹟集』から欠落している。ところが麻布美術館研究紀要に掲載された小さな写真を見れば、馬蘭亭狂歌の次の見開き両面には大きな方形紙の、また帖の最終面にはうっすら菱形の、いずれも貼付跡がたしかに見える。そしてその二箇所とも、あたかも剥ぎ跡の空白を覆い隠すがごとくに、上から金子氏の手書による大きな解題紙箋が貼られているのである。前者の原本は現在不明だが、後者の福祿寿の菱形箋が、中村家にまだ書画帖が残っていた時期にここから剥がされ、元々その「えきぬ」と一緒に来た江戸からの南畝書簡とともに保存されたと考えれば、現『名蹟集』の折帖は、長崎の中村家にあった元帖そのものであることもほぼ確かなのではなからうか。

さて、この写しの冒頭内題部分には、次のような識語があった。

崎陽蜀山翁在任中書遺法帖

辛亥秋不思議に藤田か持参りしを見て直様些写し置

外浦街乙名 中村清三郎

祖父作五郎用達之節取集候由

辛亥は嘉永四年。「藤田」は、前述鶴枕記文巻の題字を書いた「市仙」藤田天外の関係でもあるか。すなわちこの識語は、南畝と親しかった李圀中村作五郎の孫清三郎の代になって、久しく家蔵から離れていたこの書画帖

に、「不思議に」も藤田が持参して再会出来たことを物語っている。だから、柴田氏のかつての推測通り、この書画帖はもともと蒐集者作五郎の所有であったと断定してよい。それが何らかの事情で中村家を去り、その後の変転は分からないが、他家をわたったのち、金子静枝なる人物の手によつて解題箋が二枚の剥落跡と余白数ヶ所に貼り加えられ、現在の『名蹟集』の体裁に落ち着いたということになる。清三郎の作ったこの写しが書画帖の現物をもとに作られた証左には、前述した通り諸作品の頭に「半切」「唐紙」「奉書」「扇面」「短冊」といった原書画の体裁が小書きされていることでも分かる。もちろんそれらは今の『名蹟集』と符合する。

そして、この写し自体が中村作五郎家の裔によつて作られたことは、最初の「西遊吟草」扉に中村家の蔵書印二顆が捺されていたことを想起させるに充分であろう。そこで注目せざるを得ないのが「西遊吟草」の書写識語、および「鶴枕之伝」の扉字を書いた「雅楽堂」なる者の存在である。この雅楽堂を、この写本制作と関わる中村家の誰か、たとえば李固の孫清三郎か、あるいはその父親あたりにあててみることは、それほど強引な推理ともいえない。しかも「鶴枕之伝」中、斎藤秋圃と江稼圃の二枚の唐人図を、実に細密に書写したのが「伊寿氣」あるいは「以寿氣」（伊助？）なる「雅楽堂の臣」であると両図に朱注があり、この書きぶりから、これ自体が又写しではなく雅楽堂と絵心のあつたその家来によつて作られたことを示唆するものであり、中村家＝雅楽堂の可能性は益々高まるのではないかと思う。

ただし紛わしいのはこの写本第四の部分末尾、すなわち本書全体の末尾にあたるこの識語であろう。それは次のようなものであつた。

右四品之書類天保癸卯崎陽に一歳在任其節及見聞間に（認置て一卷之書成

華不斷園 印（家在／墨川／之東）（朱文方印・実捺）

これは、この写本全体が「華不斷園」なる江戸人が長崎出張した際にかき集めたものであることを示すものようにみえるが、もしそう解するならば、この写本を作り、所持していたのが長崎の中村家である本稿での推論と齟齬する。この「四品」とは、最初に揚げたこの写本の四つの部分ではなく、この第四の部分の抜抄が元來四種の書物からなされた（現在は「芳野道の記」「合璧聯珠」の二書）ことを意味するのか、中村家で作られたとおぼしき前三種の写本に自分の心覚えの第四の部分を含綴し所持していたことを指すのか。写本各部の成立時を推定すれば、それは明らかに前者だったと愚考するが、墨東在住の「華不斷園」なる人物の素性が知られぬ現在、これ以上の詮索はせずに措く。

大坂新町の幫間あがりで、どんな画風も巧みにこなす飛び切りの腕前をもった絵師や、文武書画に長じながら出世や商売に疎く、日本に来て多くの人がとを魅了していた蘇州出身の唐船主や、幕府の財務官僚でありながら雅俗両道の自在な才筆を備えた文人らが、たまさか時と場所を同じうして、貴妃愛用の枕などという虚誕にすすんで身をひたした。玉の浦に響いていたそうしたかれらの風韻を伝えるよすがとして、この写本を紹介してみただけであるが、右の華不斷園のことなど不明な点は余りにも多い。大方のご教示を乞う。

## 5 『崎陽蜀山人書集』（抄）翻刻

## 《凡例》

- ・「」は丁移りを示す。
- ・「西遊吟草」の部分のみ、便宜上作品に通し番号を付した。
- ・四桁の洋数字は『大田南畝全集』での詩番号を示す。
- ・＊は宮崎注記。『全集』での該当箇所も適宜示した。○番号は『全集』の巻、タテ並びの洋数字はその頁を示す。へゝ内は原本での割書きを示す。【 】は後掲の写真にある図の位置を示す。なお、字体は通行のものに改め、句読点も適宜補ったが、清濁は原本のままにした。

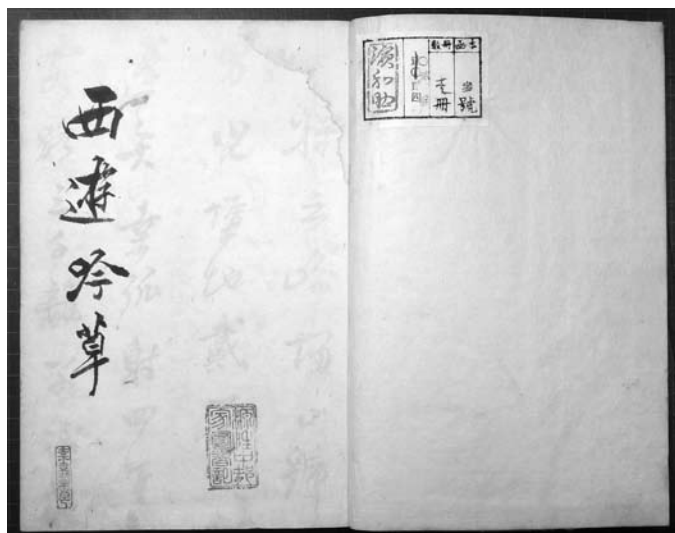
「崎陽蜀山人書集 全」（表紙、左肩題簽、打曇り・印刷子持ち枠に墨書）

「西遊吟草」（扉題・左肩墨書）【写真5】

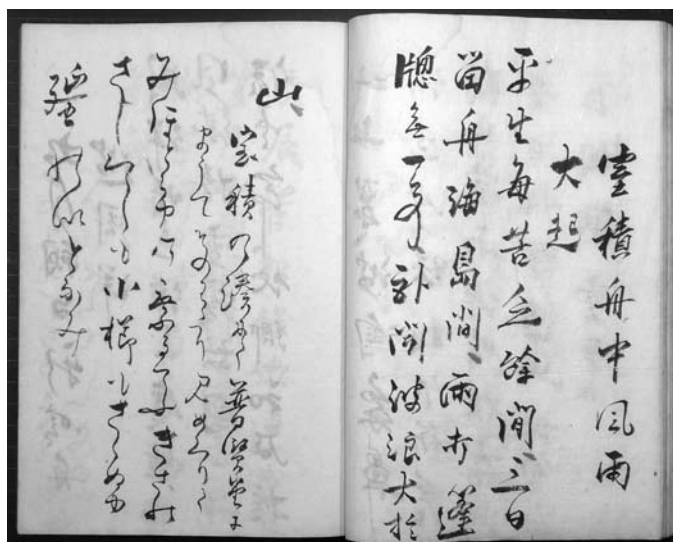
将之崎陽口号

1 男児墮地戴蒼々 蓬矢桑弧射四方 客路三千離別淚 臨「岐不敢灑衣裳

偶成



【写真5】「西遊吟草」 扉



【写真6】「西遊吟草」 本文

2 逃名々益起 辞利々将多 自笑老樗散 無如名利何」

長崎にゆかんとていてたつころ

3 海山のさはりもあらしかそいろのみかけをうけて君につかへは」

\* 巴人集② 4 4 1、2468

\* 巴人集② 4 4 2 改

4 玉ひろふ浦としきけはしら波のかけてもふまし浜の真砂地 \*巴人集② 4 4 1 百舌の草茎⑧ 4 5 8

鎌倉にてよめる」

5 薪こるかまくら山のいにしへにはあらぬものはたゝ秋の風

過右幕下墟

6 禾黍離々入旧都 秋」風無処不荒蕪 欲尋三世將軍跡 冢上青苔片石孤」

遊江島

\* 2178

7 天開灵洞断崖間 捲雪驚濤拍又還 盃酒傾来濡足立 褰裳直欲到三山」

ふしのふもとにてされうた

\* 2179

8 ねかはくはふしの高根と身をにしてわかすむやとのまとをのそかむ」

過柴屋寺

9 曾開手記慕遺蹤 吐月峰西天柱峰 散步欲尋柴屋寺 穿林一徑草茸々〈世有宗長手記〉」

\* 2187

うつのやまにて

10 故郷の人にあひにしこしかたを思へはゆめかうつのやま道

さやの中山をこゆるとて四年はかりさきにうきし事なと思ひいてゝ、

11 思ひきや四とせへたてゝさやかにもさやの中山又こえんとは

さすかにふるさとなつかしくて

12 ふるさとへ遠つあふみに」なりにけりその事となくこゝろひくま野

見付の宿をいてたつころ雨しきりにふりければ

13 これをこそ旅とはいはめ」風さはき雨ふりきそひわたる海川

渡天龍川

14 大天龍望小天龍 河上天龍雲雨従 五十三」亭行欲半 長風吹送海浜松

はま名のはしのあとをたつねて」

15 いにしへの浜名のはしのあと、へは風ふきわたる松のひとつら

16 なみたて、松のすかたはいにしへのはま名のはしもかくやありけむ」

渡作矢橋

17 龍城形勝擁三河 乍見長橋臥碧波 徒有相如題柱志 無人問奈濟川何〈岡崎名龍城〉」

いせ尾張のあはひの海つらをなかめて

18 雨雲もはれたしつけき神風のいせや尾張の秋の海つら

桑海舟中作」

19 一葦飄々五兩風 片雲疎雨度遙空 早臨滄海辭仙境 回望蓬萊十二宮

20 雨歇長年催桂棹 去」晴積水見漁舟 群山漸識桑城近 彩翠迎人是勢州

石山下尋幻住菴跡〈芭蕉翁旧栖〉」

21 応神山色碧崖嵬 一脉涓泉漱石苔 幻住老人何处在 我尋遺址夢中来

望嵐山」

\* 2189 改

\* 巴人集② 4 4 5 改元紀行⑧ 1 3 7

\* 2191

\* 2192 欠

\* 2193 欠

\* 2197 欠

22 西望嵐山紫翠遙 入京便道訪漁樵 烟霞不隔臨川寺 秋水依然渡月」橋

\*2198

なにはのやとりをたちいつる頃雨さへふりければ

23 いまさらにむすひもあへぬ」なには江のあしたの雨に袖やひろけむ

秋雨辞浪華客舎

24 中秋信宿在難波 露滿蒹葭月色多 朝雨」將臨西海道 無端更渡十三河

\*2500 欠

灘とかやいへるところをすくるに酒つくるものゝ家の蔵多く見えければいいの」されことうた

25 此くらにうきをわするゝものありとたひの心をなためてそゆく

舞子浜」

26 疎松疑舞換 細磊欲珠明 谷翁東山妓 樵遊一旅情

\*2502 欠

すまの浦にて有明の月をみて」

27 はひわたる須磨と明石の中空にしはしやすらへ有明の月 \*馬蘭亭宛書簡①9 82 八月十九日の事とする

宿室津」

28 室津山色翠微々 檻外帆檣帶夕暉 明日將乘西海浪 長風万里与神飛」

\*2505 欠

しら石といふ所に舟をとゝめて

29 楫枕たひのあはれも世のうさもいさしらしいしの波の上のゆめ

泊鞆浦」

30 仙水山回列翠屏 恍疑泉石在前庭 一叢村落人烟密 古寺鐘声響晚汀

\*2510 欠

忠海夜泊」

31 帆漁辭三備 乘風進藝陽 參差回島嶼 渺瀰望洗洋 飄如芥為舟 杯水浮坳堂 倏忽變昏旦 山翠水蒼々

晚投忠海泊 々処集帆檣 舟子拾」海月 藩主致壺漿 吾曹此祇役 置郵忝寵光 升平二百歲 風靜波不揚

忠信水可踏 艱難陞可嘗 此」地名忠海 丹心庶不忘 \*2511

八月廿五夜泊加室值風雨

32 風雨捲飛濤 篷窓」寢久始 識吾精神全於一斗酒 \*2512 欠

秋雨舟次室積港

33 普賢碕下列人家 阿那風帆入水涯 黛暗蛾眉山上翠 波淘象鼻海辺沙 疎松乍断危檣出 宿雨纔晴積霧遮

昔日性公遊此地 曾將色相觀空華」 \*2514 欠

室積舟中風雨大起

34 平生每苦乏余間 三日留舟海島間 雨打篷牕無一事 臥聞波浪大於」山 \*2515 欠

室積の湊にて普賢堂にまうてそのわたり見めぐりて

35 みほとけの乗るてふきさのさしくしも小櫓もさゝぬ蟹のいとなみ」

九月朔日新晴舟過周洋

36 周洋晴色浄無塵 憶昨風濤捲雪頻 故国一辞流火節 他郷初及授」衣辰 管松緑嫩連洲臂 笠戸山回偃海浜

赤馬関辺何日達 白雲飛処影鱗々 \*2516 欠

ぶんごなたといふ文字を句の上のをきてよめる

37 ふねよせてむすふちきりもこと国のなみちはるかにたのむうき草

豊洋舟中

38 中関西去布帆輕 況値狂風暴雨晴 天末遠山纔有黛 波間絶島不知名 浹辰偃臥桺樓底 尅日速回使者行

沿海侯藩能敬命 壺漿箠食自相迎

\* 〆〆欠

右西游詩歌若干首」中節録詩二十首歌十七首以示公輔高木氏

杏花園書

印(大田／覃印) 印(南／畝)

\* 両印とも実捺ではなく写し

前書、玉の浦なる頭人高木何某所持しけるを、河久保大人のもとにて見る事ありけり。蜀翁の書とも毎々集候半心発し数々心掛けれと、また中々に攀り侍らぬに、祥ひ成哉ことし長崎の大悲葬に遊びて不斗見けるゆゑ、しはしかりて夜なべしてそ目をくるしめて摹書しける。于時あめの下長く保つ拾四とせ卯の中秋初三日なりけり。

雅楽堂主人印(雅楽)

\* この印は実捺

「鶴枕之伝

雅楽堂」(扉題・隸書)

華」表「僊」歌」(題字・篆書双鉤)

天外(双鉤) 印(天／外) 印(市僊／老人)

【写真7・8・9・10】

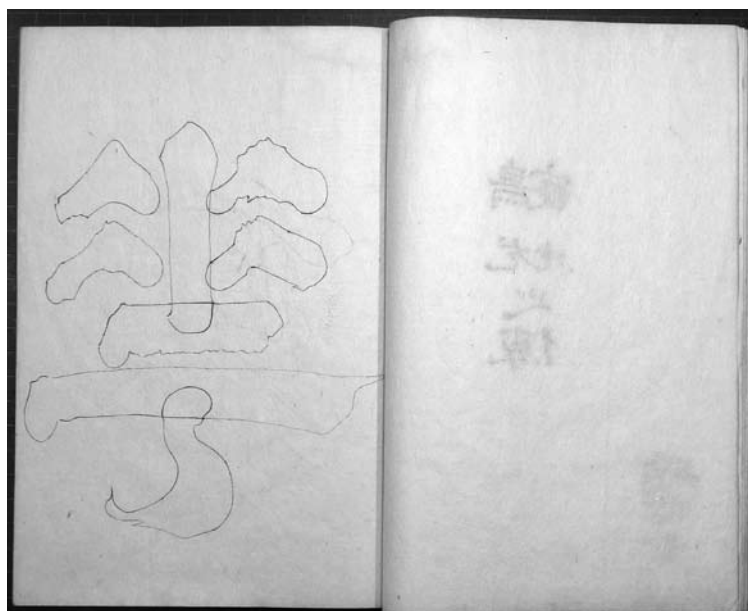
鶴枕の記

天外市仙老人、一つの長枕を携へ来りてしめす。これなん久かたのあめに」はねをならへ、あらかねの土に枝をかはさん、とみことのりせしからのみかとの枕なりとて、いにしへから人の市にやとりし頃もて来りしとそ。その頃は蜀江の錦もてつゝめるか、今はたゝ鶴の巢籠りのかたぬへるきぬのみのこれゝは、名つけてつるの枕とよふ。その枕を手しておしみればあやしく笛のねして、さなからつるのすこもりの声をなせり。今は女郎花おほかる」さにと、尾花の袖を引田とかやいへるたかとのにおさめしとなん。つの、(ママ)まくらあさやかなり、にしきのふすまきらゝかなりとうち誦して、天外老人のためにかいやりぬる。

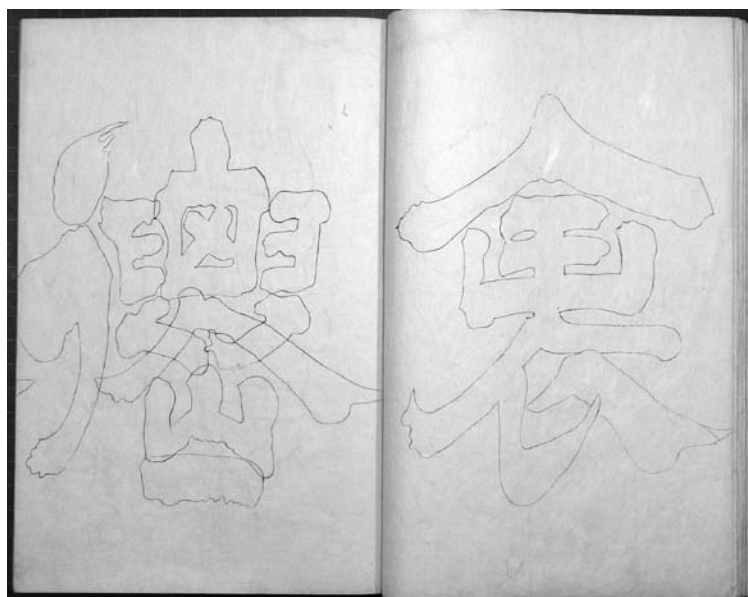
蜀山人書

□□□

\* 印記はすべて手写、以下も皆同じ



【写真7】「鶴枕之伝」 題字「華」



【写真8】「鶴枕之伝」 題字「表」「僊」

五橋とありあゝうのまた橋をうらんやとこ  
 とのりせゝわられとうやの橋をうらんやとこ  
 からの人のかたやとこはもれつりよとそ  
 はを置けの橋をうらんやとこはもれつりよとそ  
 常路うらんやとこはもれつりよとそはもれつりよとそ  
 けつりよとそはもれつりよとそはもれつりよとそ  
 れもあやうとこはもれつりよとそはもれつりよとそ  
 生ものりのをうとそはもれつりよとそはもれつりよとそ

さては屋敷の裡とて田とありてつりよとそはもれつりよとそ  
 おとろとそはもれつりよとそはもれつりよとそはもれつりよとそ  
 かのうとそはもれつりよとそはもれつりよとそはもれつりよとそ  
 光るれとそはもれつりよとそはもれつりよとそはもれつりよとそ

蜀山人

五九

繡枕楊家物 奇工聴鶴声 応知春帳夢 並駕向蓬瀛

丁卯之秋 半山 □

韋行 □

【写真11・12】

（唐美人画）（続き）

「雅楽堂臣 伊寿気写」（朱書）

夢に見し靈より雪の朝日かな

右題鶴枕 北筑 四軒

花に遊び月にたのしめる楼に、ひとつの枕あり。うへは世にめつらかなるきぬ」もてつゝみ、中にはあやしき笛をたくみたれとも、車をかへせし遊児かふけるふへにもあらず、井筒のうなるのふへ、牧童の空笛にもあらず、こゆるきのいそかぬはかりの千世をこめたる鶴てふ声をなせりとて、名つけてつるの枕とよふ。是なむむかしから人の紅閨の奇なるへし、女郎花の名に愛て落馬せし」遍昭かあた名たつとも瓊の浦のたまものなれば、ひと度は手してさはりしとなむ人にかたらむ。

花鳥のはなれぬ廓のまくらかな



【写真11】「鶴枕之伝」 唐美人図（韋行） 1



【写真12】「鶴枕之伝」 唐美人図（韋行） 2

高津の菴

印

印

」

鶴枕辞

盧生か栄花の長枕も栗のいひに覺され、莊周か一睡の手枕は虻の声に起さるへし。こゝに花月樓の錦の枕は、かり初にさはりてたにわか浦田鶴鳴わたる声のしければとて、鶴の枕となむなつ」けゝる。君か一夜のかり枕に鶴の千夜の契をこめて、人の眠りわかまともみを驚かさむとの、から人のたくみとも聞えぬ。としの夜の獺の枕、七夕の夜の星のまくら、たこの浦のたまぐに通はん人も此河竹の流にひとよの枕せは、つひにも、夜の数をかさねてちとせの樂みはつきさるましとぞ。」

佐保姫にかしてときはのまくら哉

ちぬの園

□

古枕撫来聞鶴声 仙禽護得幾筆賡 笑佗呂叟囊中物 五十春光一夢榮

右題鶴鳴枕」

都 梁

□ □

千とせの松によはひひとしく、仙家に行かふおほ鳥の、子をおもふ声親をしたふ声、ともに笹竹のひとつしをこめたれば、音声呂律おのつから相かなひ、ひとり寝しひとりは寝させしと妙なる響きを」おさむ。されはこそ雲鳥の綾の錦のよそほひをつけし鶴の枕とはいひ伝へたれば、花月楼の一奇物なり鬼。花にも月にもこれか為に匂ひをと、めひかりを添る、ゆくえ定めぬ旅人のわれ／＼かよはひ迄ものふるこ、ちせられて、たまの浦の玉の数とも算へつ、これを賛とし、あるしものとめを」そむかさるのみ。

花に声ありこれを不老の葉かな

文化庚子春

鳴たつ菴葛三

□□

蝶鳥の栄ひさしき枕かな」

雉鳴（ママ） 雉

善つくし美尽すとは此花月楼にこそ

鶴の枕こゝろか高くなりにつけり

尾張 由肆 ○

（唐人（玄宗帝）画）

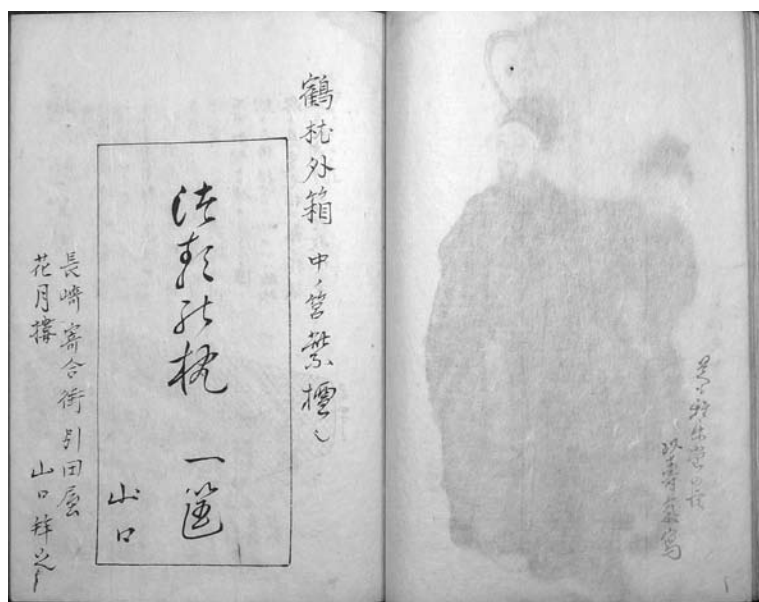
文化庚午秋日写旧 江処士□□

「是も雅楽堂の臣／以寿気写」（朱筆）

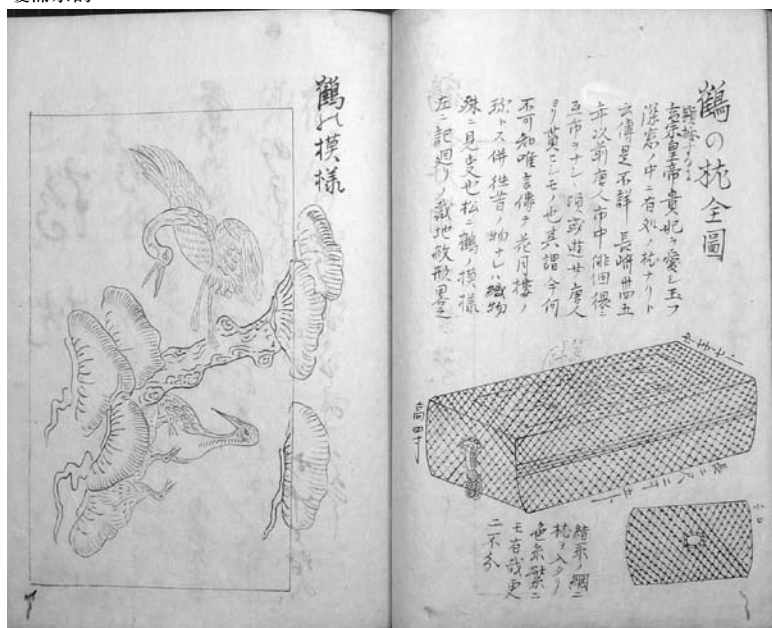
【写真13・14・15・16】



【写真13】「鶴枕之伝」 唐人図（江処士）



【写真14】「鶴枕之伝」 鶴枕外箱

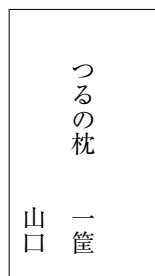


【写真15】「鶴枕之伝」 鶴枕全図と模様



【写真16】鶴の枕（写真提供：史跡料亭花月）

鶴枕外箱 中ノ筥紫檀也



長崎寄合街引田屋

花月楼 山口拜之

鶴の枕全図

顕按するに、

玄宗皇帝貴妃ヲ愛シ玉フ深窓ノ中ニ有処ノ枕ナリト云伝、是不詳。長崎卅四五年以前唐人市中徘徊猥ニ互市ヲナシ、頃、或遊女唐人ヨリ貰ヒシモノ也。其謂今何不可知。唯言伝テ花月楼ノ珍トス。併往昔ノ物ナレハ織物殊ニ見事也。松ニ鶴ノ模様左ニ記。廻リノ裁地紋形畧之。

(枕図)

巾七寸七分 長二尺二寸五分 高四分 「松鶴ノモヨフアリ」 (朱筆)

小口

緒糸ノ網ニ枕ヲ入タリ。色糸紫ニモ有哉、更ニ不分。」

鶴の模様

(模様図略)

鶴枕

鶴枕の哥をこはれしかは  
賀茂季鷹  
巢にこもるたづの音すれはぬるゝうちに見し五十とせの夢はものかは」

鶴啼や明石の城に月ひとつ

大梅

鶴舞や不断になりし磯の春

雄嶺

鶴鳴や湖のうへまで菊日和

禾木」

霞む日や鶴を西湖に呼もとす

一具閑人

日暮るるこからしきくに磯の鶴

梅室素芯」

わたり鶴さゝ浪にさすひと明り

由誓老人」

花月楼に鶴の枕とて家古くより持伝えたる一奇物ありとは聞と、みむ事かたきと思ひすてたる折からに、不斗藤田なるものゝ携へ来りて見せけるに、きゝにし日より恋しく覚へ侍れば、筥の蓋さえ取もまたれて、頓て取出し、手に取てよくく見れば、寔に是古代のものとおもわれ、これなむ中華の宮中の玩ものならんか。其さまいと尊ふとく、鶴の巢籠の模様など」縫糸処々きれて、かへつて面白く、いつこそ手の平にておしても、

もの取りておしても、雛鶴の声ありて、稀有希代未曾有の枕なり。流石に瓊の浦の玉ともいわんか。長き夜の更（よ）ふくる迄も見あくる事もなく、願はくは一夜かりて臥さはいかならむか殊に床しく、彼高樓は花月の号あれと、四季折（し）くの限りあらんや。此枕の為に愛なく引田されて通ふものも世には多かるへし。是なん人を鶴の「まくらともいは、いふへし」。

永長き夜代のためしに鶴の枕をは丸山口の高樓いへは栄へん

かつしか

鶯楽庵

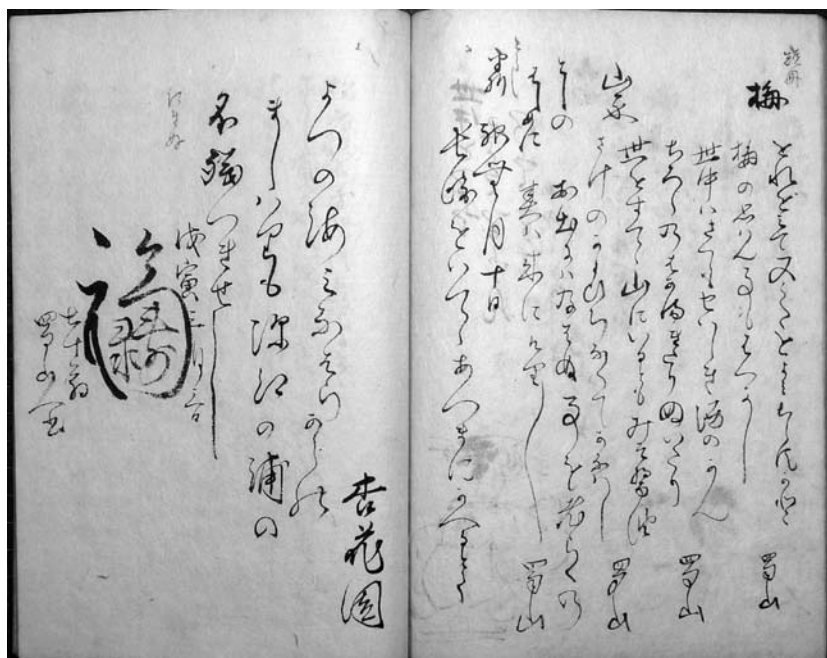
長き夜や現に鶴のまくらもと

癸戌の長月 筆を採る」

詩歌帖之跋文 久松菊也 崎陽之頭人尚時／久松鷹之丞祖先也

山口拜之か家に鶴の枕、白狐の玉、餅花の太鼓なんと、いふ世にまれなる宝ありしに、年つもり代かはりてみな家にと、まらさりしを、今の拜之か代になりて、あなぐり需め、枕のみそもとのことくに取収めたるものなり。扱この枕の事蹟は人々つはらに述べたれば、言に及はず。されと彼唐の帝、長生殿」にて七月七日の夜、比翼連理の私語（し）を此枕辺の事なるへし。されは此家にもたへず螻首蛾眉の妓婦出て、酔客に根引せられ家をうるほす基ならんか。枕啼け／＼声天に聞へてなほ福ひあらむかし。

世は夢や枕にのこる千代の声



【写真17】「崎陽蜀山翁在任中書遺法帖」 末尾

九月九日堂主人□

〔「崎陽蜀山翁在任中書遺法帖」省略〕

【写真17】

〔「松花堂芳野の道記」「珠聯合璧」抄記 省略〕

（卷末識語）

右四品之書類天保癸卯崎陽に一歳在任其節及見聞間に〳〵認置て一卷之書成

華不斷園 印（家在／墨川／之東）（朱文方印・実捺）

〔付記〕この濱和助旧蔵写本『崎陽蜀山人書集』は、十数年前、京都でのある研究会の席に、当時まだ京都大学にご在職であった松田清先生が、私のためにわざわざ持つて来て下さった資料である。これをどこかで紹介することをご慫慂下さったのだが、本文中に書いたようにこれが写し物であるという事由から、何となく躊躇したまま、今に至るまでずるに日を過ごした。わが怠惰の仕儀に対してなにとぞご海容を賜りたく思う。また若木太一先生には『崎陽雑話』の存在をお示しのうえ、原本のコピーまでお送り賜った。両先生のご学恩、

そして末筆ながらご珍藏の文物のあれこれをお見せ頂いた、史跡料亭花月の現女将中村由紀子刀自のご配慮に、慎んで鳴謝したてまつる。